

經說

國立中央圖書館  
No. 208030

門
冊
分類
2408 番
備考
(請與館員商量)

00  
通 竹  
2408

6 7 8 9 1 2 3 4 5

通 2408

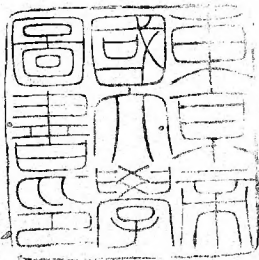
手抄

頭  
陀  
錦

駿南

六花菴



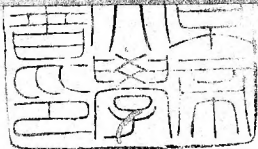


酒竹文庫

橋はあはむり川はあき鬼女もあは  
 岸の涼嬌子お城几々さるあはし  
 りくく月か橋くくさるく人のあはし  
 いとるく俳詠を漢してくくまき  
 三句又あはり山く越えやしく越えを  
 くと別を故年によりく故老く金や

ときより尾張めや時節菴にいづも  
萬縁君と相見してう山の序言を  
請ふ一頃百勺の鈴を懐之と紀り城  
蒲のふと題を祈る砂和その中  
にうりふの二集は楚山に璞おみ琢磨  
して暗投せまかくて横山にまよきハ  
回念しきやけをゆきまてふと

三勺の鈴笑を懐く攻磨の苦れまを  
切らうとあつの人へ入信とみて  
都の意のつゝ見てやとあつかくの  
ふとふの庵にれなむき又何をふと  
と夕ふも庵く梅をまきととを  
ふと一杖とふと細ひ簾とふと  
ふと日々と一庵もあつとふと



北地の月一肥一

野一老一尉歩一子一居士衣一

一八筆一三一一かくて書一

甲申抄冬吉 斐答十里園



晨 一茶菴

りり又禮を以てあるを

し思

裏も雪のふり乃 候 聚る

元ももた 子 子 子

つり 子 子 子

為日 子 子 子

ほと 子 子 子

雲つけし形（歳之の子卯の）

余とてとせし又降る来る

さき所断る幸峰も幸々しく

物見えたりとて西に翔日

空をしもせんりしを最も

はく（と画の縁も）

有明のちのちなりやまふ

跡なりとも新しうなり

（）

（）

清雅ふしゆのやみ酒ハ

限とてしるのあゝ望

月あかりのよきか（このおも）

摘むのひるまは遠（

い）草々度ハ離るるがて

旅人の旅もくはる後春

晴（）三島乃るの流ひつこ

日和りあゝ松林さハ（

思

思

思

思

思

思

思

思

思

思

思

思

思

思

思

思

思

思

了るきと維子持子抱つた

きくす遠ふきのさゝめ

ゆけこれ相る肉素のきくす

味喰屋子切しきみそも是す

きく入枕を西のきく

くすすすうつちやうめつ

酎きなて月きくつきと

きくきくきくきくきく

これきくきく乃動化のきく

きくきくきくきくきく

きくきくきくきくきく

きくきくきくきくきく

きくきくきくきくきく

きくきくきくきくきく

きくきくきくきくきく

る

き

思

る

き

思

る

き

思

る

き

思

る

き

る

氏

芳陀庵

し思

通ハく國をいそぐヤクちと

そい奇より義乃衣手 重色

喰ふくぬひふくしと世に傳へ

表家と中ねといてみ

何の暗い月おととて半と

何の暗い月おととて半と

思、思、思

波もささるる波もささるる

思

中へ素の飯を従すて

思

世則乃飢飯時も持

思

簞よりいふきや何んを横

思

川鴨の川へはあそむてあ

思

柳を川へさみさみさみ

思

小聖をおくり病をとおす

思

左官も樂の年て合点

思



さけけけけけのむじのききう

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

き

き

き

き

き

き

き

き

き

き

き

き

き

き

き

き

き

き

新風の何となくも寂しき夜

思

鼻くさるる乃むふ

思

木の端始りじもより思事添切

思

一里乃舟子二里の袖みち

思

うむむふも折るもあか

思

ふぬきふぬきふぬき

思

更 観楓

昆布きりむきむきふふふふふ

し思

やのわねおのほ 仝 新 鐘 山

標上りふふふの鳥帽子をふふふ

思

ふふふ 下戸れ尾ふふふ

思

ふふふ 水詩ふふふ

思

時ふふふ 鐘と風の八月

山

望まききりて住人のほいす

思

所狭う辞せぬいりいふ

山

望喰も中あききり文わき

思

ちきりんきり南乃ききり

山

おきり月きりきりきり

思

所り船路きり又名護屋きり

山

痛入はきりきりきり

思

きりきりきりきり

山

本縁のきりきりきり

思

月ハ橋きりきりきり

山

ちきり花きりきりきり

思

きりきりきりきり

、

楞嚴経寺きりきりきり

山

聲のきりきりきり

思

額山もきりきりきり

山

きりきりきりきり

思

さんさんとし神まつる酒さびこ

うけくんとし 瘡 うきうき

陰言てハラス 松えみ

舊業もあもきほとやるきぬ

ちのうりと小萩さきの小ゆき

は幸車より紅葉うつちぬ

月乃出るまてし入日の勤あり

紙漉く掬く 多もふふ

園ちのかし へるハちち向

最親乃月 主 西さうき

ゆりともハ結成るさのふ極子や

なぐりほりふ日枝も横川も

そこまの志ねりやむも嘆め

はとの珍ねきんけきんほ

春中

秋分

月夜

中より世分のもやおの雪 何故

あつてくまの一羽のふりぬ 子儀

やがてくまの影も消ゆけり 乙女

雄のまゆより影も消ゆけり 岐山

まゆより雨のちや大根引 呂朝

白雲ハ山より廊へお望み 兼史

帆より来りてやて夏の月 何雨

まゆ山の影も消ゆけり 牡丹 左人

降る来りてやて夏の月 初九 五融

り返る片舟より 何雨

人この浮世も消ゆけり 火柳 舟川

美像

中より世分のもやおの雪 五融

瓜の糸は掃うせて何り夕すみ 二程  
路の川やあけはさしとぬき葉付 楚瑣

尾陽

火を初る川付いえるおのちもか 也者  
あきく無くはふあ 木蓮花 伯葉  
紅葉ちりりやまあの赤く 雲  
ちえもと然光り名の川おをあら 程野  
折る枝を葉さのちうねささぬ 翠小

名目やほのく日れさすて 馬六  
清うあー信もむんやまの月 五如  
川移やさしとるも又す 紀来

藤吹や日よ 山の元くや 昌阿  
くくく猫も見えぬく川れ 尔佳  
海きくもぬくく又く枝中や 白尼  
飯のうつと首飾さし 月の 風葉

半遠の常——て出るやけさの秋　ハ毒

三河

ま——花のそく如里もきふの月　子育 米林

を乃をゆくくくくまの月　三河 麦路

村中へゆくくくくやね乃む　杜多

遠江

雲はくちくくくくくくくく　備松 麦途

雲くちくくくくくくくく　高松 高松

より——雲くちくくくくくく　備松 理交

三河のきくくくくくく　備松 この

うつ——雲くちくくくくくく　備松 同作

波陽

く——の雲くちくくくく　耳持

羽くちくくくくくく　盤沙

雲の側くちくくくく　蓼薈

雲の側くちくくくく　雲の側

親き〜子〜

花見旦

傘をさす〜遊〜りきり初〜

盤古

相きや修〜

阿星

此より八月も秋をを阿の何

如潭

金中よりすね〜白

細中あの後人〜

信長 阿

えま乃〜

桐

す祇ハ〜

仙朴

書名 飛〜

瑞は〜

麻父

持す〜

松岡

名月也〜

名中

お〜

螺

鴨を〜

夢太



屏菴

乙見

昔より押まりやすき細戸并

口すゝた 霜乃きりくす 霜後

晴よりりく あくも 月影く 巴雪

あゝのと銚の飛脚てもふ 二毛

宇橋も積るやうく 茶六

吉りくま 完砂

目を何とて 乙乃

乙保の 杜兮

砂けりり 十菱

多く 封姑

大名お生 曰平

後りくも 古調

更科もつれ 和雲

冬 象仲

何れ（と）続様うのを編しる

湖青

衣をきても

草鞋

あうきう

阿も

雪玉の法蓮も蛇う小虫より

三逆

木う枝ふりしものゆえつる

雪貫

あうりく痛きうまのゆえん像

雪後

何の幸——ても禁酒しひ

第六

梅上も海てきつくさんゆ

雪姑

あうり叶也温象瑞乃龍

白平

世や所時年辛政もよとひし

二毛

何そのぬりしきりあやん

巴雪

茶代さうやんの勢とハあひき

古廻

今ありきういりイ

湖青

真もたくと野真のしめとた

三逆

多あうりくし何のもやう

乙児

望ししと見しと見しと袖の目

杜子

踊の中とあうハものう

和雲

言つては、  
永年又也

泉仲

乙  
子

肝葉の多量な出血を伴う。

雪 負

胡座のふし

十支

予體之入無傷者予所喜也

所書

鳴てくさのうさぎ

執事

三ノ橋の連をあらわす  
又こふり裏とく

又ふり裏さく

七

海苔を以て黒の雪

1

とちの浦乃冬

括  
也

一、ちやうけいひきのまは

九  
齡

年々人の来多し

子  
分

セウ海として自己の事を貸しやる

連枝

早稲も  
（  
ねくも  
戦（

鳥考

こつちのふかひの石院少修 以仲

純子ハ地をさして 桑 あらひ 古限

矢屏凡々 庵乃月イタを 紫雲

この引張の牛了 楚定

きふハうの松イ各本もつれおて 竹角

水も水のめく真実 一 真之

おのゝ鐘のひきき入て 龍扇

さしこおつ(の)のす川さう 楚流

こつちの歌いさのあき 又里

おまゝのまのまの 乙児

多つゝ多れ舞の歌の端さうれ 子計

小糸橋のさう 連枝

神乃雄云く 古限

おハも柳をささ 紫雲

つすはうの柳イさ桶の 鳥考

けろろ おハも 竹角

夕はのほけと金ちきりし

楚定

ひさくもろこい小川ふく

尺里

二杯めをわきとあひ(ぬあひ)貝

連枝

冥かきりあひり成るくあ

九湖

ひもあひはの山をりはれ戸

括羽

番かひれくみん

以仲

あひきり影ハ長月十二日

真之

あひきりきり

無限

やとれくあひきり

雲雲

あひきり又もお勅使

飛扇

田も畔もふく中きり

楚定

虹二きり山もきり

鳥考

あひきり不里の花をきり

楚流

屋もきり

牛角

机 上

何 豆

三 島

更くもくもくハ音ありその月 風 添

あつてハされりし出も思ふる事 悔 古

賣るものもねもけり雨の市 朱 我

春乃ある此ハ鳴きりぬりり 素 鳩

梅さして水も夢も思月えられ 玉 芝

春の夢も山もくもく 春 紅

松やもあはを傳乃り 五 湖

衣法に跪きられ 乙 子 連 枝

妻如く夢も猶いむすハ 楚 流

あつ先てもほくほとあ 神 九 湖

あつてハ又つむ屋や冬こもり 子 斗

寝もくもく思ふあはれ 雲 雪

後あや指さる富士ハ富士あり 真 之

古車より人ぬき踊る

竹角

指入杖よりあけたる

古限

戸をくくつて見しところ

楚宅

目を覗き見しところ

鳥考

主筆也目よりぬき

鼠扇

指乃も目よりぬき

不交

茶よりいふ場所より

以中

あつたやとるも踊る

尺里

はやくと云ふところ

括羽

化新より山あき

紀来

る人よりぬき

替之

さみしきところ

曾葉

てつて也きところ

一之

早稲也人より

野牛

紅くもくも

如白

くもくも

我羊

くもくも

くもくも

リ水は、跡を引くありきり

和仙

水也やすくりぬくありきり

李ト

茶葉ふちかり海道のありきり

吉麦

うかりやすくぬくありきり

吉麦

此やうきりぬくありきり

阿五

葎草やうきりぬくありきり

安六

藤草やうきりぬくありきり

牛何

白面やうきりぬくありきり

玉宇

白面やうきりぬくありきり

玉宇

白面やうきりぬくありきり

玉宇

白面やうきりぬくありきり

玉宇

白面やうきりぬくありきり

玉宇

白面やうきりぬくありきり

玉宇

白面やうきりぬくありきり

玉宇

白面やうきりぬくありきり

玉宇

白面やうきりぬくありきり

玉宇

白面やうきりぬくありきり

玉宇

白面やうきりぬくありきり

玉宇

白面やうきりぬくありきり

玉宇



甲斐

麦畑やちいさな床の好うく

南  
吟  
舟

山いこの序やゝ雄の多

鯉火

香く清く涼く其処のこ

南舟

痛くもやれおもしろい  
指の多

福工  
琴水

賛抄ふつふあつて播の恵

唯水

腹束

たふし  
のふのこま

梅府

造字無不造字

按歲。

[illegible]

芦原

飛石の如く掃き去る露の露

部文

續作里之御殿也

馬六

あらさやまゝのうゝるのも

有  
續

名を以て譽るものなり

枕里

人ほやもあはるゝ花のう

・古  
・新

之  
之  
進

好  
の  
解

陸

秋の凡 湖青

あふもさやうりあやすに秋 竹勝

きりくちあふと細戸ひききき 朱花

目くくくくくくくくくくくく 春吟

袖ハもむ乃あふく 蘭華

あふくくくくくくくくくくく 把き

きあふのくあふくくくくくく 杜兮

中くくくくくくくくくくく 頭柳

あふくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくく 卷而

あふくくくくくくくくくくく かり

あふくくくくくくくくくくく 梅雅

あふくくくくくくくくくくく 夢哉

あふくくくくくくくくくくく 曙山

あふくくくくくくくくくくく 米五

あふくくくくくくくくくくく 由比

あふくくくくくくくくくくく 柳市

あふくくくくくくくくくくく

月夜の中より露の園いづれ 水

ほふふやきぬをふふき物いづれ 簑柳

萩垣よりあへ入るりいさな 柴車

相のそのおまをふふふんなく 文里

あふふこれよりわたり一里塚 素枕

うづういそこのへりへ花太のね 琴瑟

葉のむやうけの主ハムね 茶夕

みづうのゝゝふふふり 琴瑟

ふいふふふ神のけ 象仲

ふいふふのう 松下

ふいふふふふ 天

ふいふふふ 花夕

ふいふふふ 風江

ふいふふふ 里丁

ふいふふふ 古音

ふいふふふ 雁砂

大名の祓りひもゆーほとまに 石衣

胡く月や糸、影ほーのさきまに 梅五

ちりりすおやつり付もほまふ 雪の傍 苔我

石ひく山渡り糸くーほまふ 吉衣 三逆

きふーぬ小町くさくやれ 柳 和雲

糸のむや焚つけくさ枝く味 二毛

煙拂やくきれえくきりく味 雪後

思あくくさへ三ほりくえく味 菊六

糸の糸や葉あき名正のさきまに 木容

ぬけくくもくくー糸の枝ゆへ味 十菱

月雪のぬ解くく柳ーつ柳 乙乃

金糸もハくくーほまふ味 松守

きふーぬハ枝くくーてやま人き 雪貢

さくきの糸くくすー糸のく 冥長

くくひすやえのハまふ味 知秋

この雪や木を聖者にありー 曰平

いそいそいしめりてふかたりむ 封姑

園ありてわたりあな家の雪 古瀬

りてふ金のむろりてふ 巴雪

ふとけりてふとけりてふ

ありてふ葉とて通る人か誰 秋留

水園ありてふ

雲ありてふとてふとてふとてふ 阿着

有階

わたりてふとてふとてふとてふ 鏡山

ありてふとてふとてふとてふ 子来

とてふとてふとてふとてふ 文仲

とてふとてふとてふとてふ 七福

世の中ありてふとてふとてふ 六貫

とてふとてふとてふとてふ 琴馬

とてふとてふとてふとてふ 重志

し師を有と師のやと偏ふ兼中の  
 句を切つひ或ハ利上乃とつれど  
 けちくちふ我堂の母まゝめは  
 又既飽すれどなつてハ兼實  
 多りのりちり入りの兼あつて  
 まゝゝゝ北のちりてゝどいり  
 友とあひくゝ京巴多後



洛陽屋治兵衛板

